2024 年 11 月 2 日に、第 14 回大阪医科薬科大学 内科学Ⅰ 糖尿病代謝・内分泌研究会、通称「EndoDM カンファレンス」が大阪の北浜で開催されました。北浜は知る人ぞ知るお薬の街で、今でもたくさんの製薬会社が北浜にあります。

北浜の道修町（どしょうまち）にある少彦名（すくなひこな）神社、
通称は神農（しんのう）さん、日本医薬総鎮守、お薬の神様です。

年に一度、大学とその関連病院で糖尿病代謝・内分泌の診療に関わる医師が一堂に会し、症例検討会や教育講演を開催します。そして会の後半に、ご高名な先生をお招きしての特別講演があります。今回は、奈良県立医科大学 糖尿病・内分泌内科学講座 教授 高橋 裕 先生の「新たな下垂体疾患の樹立と学問体系の提唱－教科書を書き換えるような仕事をしよう－」でした。（奈良県立医科大学糖尿病・内分泌内科学講座 H.P.参照 https://naramed-endocrinology.com/）

高橋先生は、ご自身のライフワークである“抗 PIT- 1 下垂体炎（抗 PIT-1 抗体症候群）”の発見から“傍腫瘍自己免疫性下垂体炎”の概念を打ち立てるまでの道のりを、分かり易く面白く、軽快なトークでお話して下さいました。高橋先生の医学的なお話もさることながら、先生の明るく前向きで、ひたむきに医学の神髄を追求するお姿に感銘を受け、勇気と希望を頂きました。“1 例・1 例を大切に見よう”“症例を経験したら、耳学問だけでなく、必ず教科書を読んで系統だった知識にしよう”“科学的探究心を持ち、どんどん学会発表・症例報告をしよう。英語論文にも挑戦しよう”そして、“Subspecialist（糖尿病・内分泌専門医）たるもの Generalist（総合内科専門医）たれ”“血糖屋(血糖コントロールだけする医者)、臓器屋（特定の臓器だけ診療する医者）になるな”

本当は若い先生に向けられたメッセージなんですが、若くない（笑）主任部長の心にもグサッと刺さりました。高橋先生はまた、同教室のホームページで「教授エッセイ」というものを不定期で公開されており（まるで某・主任部長の「糖尿病センターだより」みたいですね！）、そちらを拝見すると 2021 年 12 月号に素敵な言葉がありましたので引用させて頂きます。

「全ての壁は扉である」

これは、米国の思想家・哲学者であるエマーソンの言葉です。

Every wall is a door の後に、And you have the key と続きます。

私たちは志を高くして仕事に取り組んでいると多くの壁に当たります。そこで諦めてしまいたくなるかもしれませんが、実はこの壁に見えているものは扉でどこかに入り口がありその鍵は自分が持っているのだと考えることができると、壁を乗り越え成長するきっかけになるでしょう。人生において袋小路でどうにもならないと感じることがあっても、全力を尽くしていると意外な出口が見つかったり、思わぬ支援者が現れることがあります。私が敬愛する安藤忠雄先生も出口は常に自分が探していない場所にあると述べておられます。私も若い時にはわからなかったのですが、自分で経験して実感しました。若い先生たちには、壁にぶち当たっても実は扉なのだと考えて乗り越えて成長してほしいと思います。そして壁に当たっている人を見れば手を差し伸べてほしいと思います。

北浜からの帰り道、結構寒かったのに、なんだか心がポカポカしながら歩いていると偉大な人に会いました。関西の経済の礎を築いた五代友厚公です。2015 年 NHK 朝ドラ「あさが来た」の五代友厚役ディーン・フジオカさんの“おディーン様”スマイルに、すっかりはまってしまった主任部長なのでした（笑）。